

日韓における大学生の感謝表現の比較研究

A Comparative Study on the Expressions of Gratitude of the College Students in Japan and Korea

金 明熙 KIM, Myeong-Hee

● 駿台外語&ビジネス専門学校
Sundaigaigo & Business Training School

呉 恵卿 OHE, Hye-Gyeong

● 国際基督教大学
International Christian University

 **Keywords** 感謝表現, 感謝の場面, ストラテジー, 日韓の大学生
expressions of gratitude, situations of gratitude, strategies, university students in Japan & Korea

ABSTRACT

本稿の目的は、恩を施してくれた相手に対する感情的負債がある特定の場面で、韓国語学習者が韓国の社会及び文化が持っている特殊性を理解し、語用論的な失敗なく、状況や場面に応じて適切な韓国語の感謝表現を使用できるよう手助けすることである。感謝はそれ自体で連鎖的行為であり、言語的・非言語的リソースを通して行われる。本稿では、言語的手段を通して伝達される感謝行為を感謝表現と定義し、文化的に普遍と考えられる感謝行動が日本と韓国においてどのように表れているのかを社会言語学の観点から分析、考察する。これまでの先行研究では、感謝ストラテジーが場面や状況に応じてどのように異なっているのかについては、具体的な記述や分析が行われていない。しかし、ストラテジーは場面や状況に応じていつでも流動的に修正、変更される可能性があり、各場面に適切な戦略を使用できない失敗は韓国語を勉強する学習者の語用論的な失敗に繋がることも排除できない。したがって本稿では、社会的地位、親疎関係、負担程度など、様々な社会的要因を考慮した談話完成テスト (Discourse Completion Test, 以下 DCT) を行い、DCT で抽出されたストラテジーの類型が集団・場面・社会的要因によってどのように用いられているのかに重点をあて分析、考察を行っている。

The aims of the research are to help Japanese students who study Korean language to understand the uniqueness of the language in the situation of gratitude, a specific situation where speakers feel burdened emotionally, and to use the appropriate expressions in the situations in Korean without pragmatic failure. Gratitude is a speech act that occurs in a chain discourse. It can be performed with/through language and/or non-language resources. This research analyzes the common points and differences of the speech act in situations of gratitude between university students in Korea and Japan. Previous literature in this area in comparative sociolinguistics between Korea and Japan has not included an adequate description of the differences in the strategies used by both speech communities for showing gratitude in a variety of situations. The strategies, however, can be modified by circumstances in each culture. Failure to use the appropriate strategies can cause pragmatic frustration for Korean learners in Japan. This research employed a DCT reflecting factors of social status, degree of intimacy and degree of burden. The interaction of culture, situations, and social factors as well as the differences in expressions of gratitude in Korea and Japan were analyzed.

1. はじめに

本稿の目的は、恩を施してくれた相手に対する感情的負債がある特定の場面で、韓国語学習者が韓国の社会及び文化が持っている特殊性を理解し、語用論的な失敗 (pragmatic failure) (Thomas, 1983) なく、状況や場面に応じて適切な韓国語の感謝表現を使用できるよう手助けすることである。感謝表現はそれ自体で一つの言語行動であり、「감사 인사 (感謝の挨拶)」という言葉からもうかがえるように、挨拶行動の下位概念としてみなされることもある。交感的コミュニケーション (phatic communication) (Jakobson, 1960; Malinowski, 1923) の一つとして分類される挨拶は、社会と文化を問わず話し手と聞き手のコミュニケーション・チャンネルを開放し、人間関係を維持・交渉するための重要な手段として機能する。このような理由で、挨拶という行為は日本でも韓国でも人間関係の構築において重要な手段あるいはプロセスとして認識されている。特に韓国では、「인사성 (挨拶性)」という言葉からも分かるように、挨拶行動は個人の人格や品性を判断する尺度としても使われている。したがって、挨拶行動としての感謝も、円滑な人間関係のやり取りに重要な役割を果たしているといえるだろう。

2. 先行研究、本稿の方向性及び意義

感謝表現に関する日本での先行研究は、洪 (2006)、三宅 (1993, 1994)、小川 (1995) で見られるように、感謝する場面における謝罪表現の使用にかかわるものが大部分を占めている。最近では、日本語と諸外国語の対照研究も行われているが (李, 2012; 谷口, 2010)、感謝する場面における日韓対照研究のうち、日本で行われたものには秦 (2002)、李 (2012)、生越 (1994) などがある。生越 (1994) では、日韓の文学作品や映画などで使われている定型的な感謝表現を年齢・親疎といった社会的要因を中心に分析し、韓国における感謝表現はソト¹・目上の関係で使われる傾向があると述べている。秦 (2002) では、TV ドラマや映画を題材に感謝表現を定型表現とそれ以外のストラテジーに分けて分析を行い、韓国語では定型表現より「定型表現以外のストラテジー」をより頻繁に使用する傾向があると述べている。李 (2012) では、日韓でアンケート調査を行い、日本人は感謝表現を言葉で伝える傾向が強い反面、韓国人は非言語行動だけで済ますこともよくあるということを指摘した。これらの研究では、言語行動における日韓の違い、つまり日本では親疎関係が、韓国では年齢などの上下関係が、それぞれ感謝表現の有無を決める要因であると述べている。

感謝表現は、感情的負債を感じた話し手がこれ

を返済、あるいは相殺するために用いる表現で、話者の意図が反映された戦略としてみることもできる。秦（2002）以外に日本人と韓国人の感謝表現を戦略的側面から比較し、分析を行ったものには、守屋（2001, 2002, 2004, 2007）、Song & Mizushima（2002）などがある。Song & Mizushima（2002）によると、韓国人は日本人に比べ感謝を表現する頻度は低いが、感謝する場面で定型的に用いられる「感謝する」、「ありがとう」という言葉を口にしなかった場合は、「お世話になったから今度お返しする」という約束をしたり、他の恩返しを提案する戦略を頻繁に駆使すると述べている。守屋（2007）でも、韓国人は家族や親友など、「ウチ」関係の人々には定型的感謝表現を言わない代わりに、感謝の事柄、あるいはそのことが自分に与えてくれた利益に触れたり、恩返しの提案など、様々な戦略を積極的に使っていると述べている。さらに守屋（2007）では、目下には感謝を表す手段として、韓国では褒めの戦略が頻繁に使われていると指摘している。その他の先行研究として、プレゼントをあげる・もらうという場面に限定した調査を行った金（2005）では、プレゼントをもらうという、負債を強く感じる場面では、韓国人も「이런 미안해서 어찌나...（あら、申し訳なくてどうしよう）」のように、感謝の場面で謝罪表現を使用することもあったと語っている。金（2005）によると、韓国では謝罪表現以外に、「뭐 하러 이런 거 가져왔어?（どうしてこのようなものを持ってきたの?）」のように、一見相手を責めるようにみられる表現が使われることもあるが、このような表現は日本人には見られなかったと述べている。

以上、感謝表現におけるこれまでの日韓対照研究を概観したが、これらの研究は誰（日本人・韓国人）が、いつ（どのような場面で）、どのように語るのか（定型表現・非定型表現、戦略の駆使など）を明らかにすることに焦点が当てられている。特に、戦略的側面からの感謝表現の研究は、「인사성（挨拶性）」を重視するという韓国人が、どうして感謝の挨拶をしっかりと口で言わな

いのかということに対する疑問から出発した試みとみられる。これまでの研究の結果によると、韓国人は親しい関係では定型表現はあまり使わず、定型化していない様々な言語表現を用いて感謝という行為を遂行していることが明らかになった。さらに、韓国人に頻繁にみられるこのような非定型化した感謝は、戦略、すなわち自分と相手の関係を維持・交渉するための有効な手段として働いていることも指摘されている。しかし、これまでの先行研究では、感謝戦略が場面や状況に応じてどのように異なって表れているのかについては、具体的な記述や分析が行われていない。場面によってどのような感謝戦略が用いられているのかを究明することはきわめて重要である。戦略は場面や状況に応じていつでも流動的に修正、変更される可能性があり、各場面に適切な戦略を使用できない失敗は韓国語を勉強する学習者の語用論的な失敗に繋がることも排除できないためである。したがって、本稿ではこれまでの研究をさらに発展させる形で、(1) 社会的地位、(2) 親疎関係、(3) 負担程度など、様々な社会的要因を考慮した DCT を行い、集団と社会的要因という変数に加え、感謝戦略の類型が場面によってどのように用いられているのかに重点をあて、分析と考察を行う。

3. 調査の概要

これまでの研究は、主に社会的要因によって日本人と韓国人はどのような感謝戦略を多く使っているのかに重点が置かれており、最も大事な場面、あるいは場面と社会的要因を同時に考慮して行われる感謝戦略の変化に注目したものは殆ど見当たらない。したがって、本研究では、同じような場面において日韓の人々はそれぞれどのような感謝戦略を頻繁に用いているのか、そして同じような場面でも社会的要因によって感謝戦略がどのように変わるのかという傾向を分析・考察するために、大量の談話データ収集に有利な DCT を作成し、日本と韓国の大学生を対象に調査を行った。分析の対象と

なる談話データの場合、場面や状況によって変化していく話者のストラテジーを綿密に観察するためには自然発話（naturally occurring discourse）を収集して分析することが望ましいだろう。しかし、自然談話では調査者が研究目的に合わせて変数をコントロールすることが極めて難しく、本研究の目的に応じたデータを大量に収集することは容易ではない。語用論や発話行為の研究でデータ収集に広く採用されている DCT の場合、自由記入式のアンケート調査であるため、研究目的に適した大量のデータを容易に収集することができる。Mey（1993）では、回答の長さがアンケート調査用紙のスペースに影響される等、DCT が持つ限界や短所についていくつか指摘しているが、調査者の時間的・物理的制約に加え、場面や社会的要因に応じた日韓の感謝ストラテジーの使用傾向の比較という本稿の目的を達成するためには、ある程度大量のデータが必要である。したがって、本稿では調査者が事前にいくつかの場面や社会的要因を設定した DCT を採用して調査と分析を行っている。

3.1 調査対象

分析の対象となるデータ収集にあたって、本研究では日本と韓国の大学生を対象に DCT を実施した。調査は、2017 年 6 月 12 日から 6 月 23 日までの約 2 週間にわたって、韓国の釜山²と東京でそれぞれ行われた。DCT は、知人に頼んで東京では韓国語を副専攻として選択している大学生に、釜山では日本語を専攻している大学生に実施したが、特に対象者の専攻を意図したものではない。所要時間は約 20 分程度かかった。調査対象の概要は、表 1 の通りである。

表 1 調査対象の概要

	韓国人大学生	日本人大学生
人数	40 名	37 名
地域	釜山在住	東京在住
年齢	20～24 歳：33 名、25～28 歳：7 名	19～24 歳：37 名
性別	男子：11 名、女子：29 名	男子：1 名、女子：36 名

(注) 韓国人男子学生の場合、在学中に軍隊に行くことが多く、一般大学生とは年齢の差がある。

3.2 DCT の構成方法と内容

DCT の内容を構成することにあたって、感謝表現が行われる場面や状況の設定については Coulmas（1981）の「感謝の対象（the object of gratitude）」を参考にした。感謝表現の研究を触発した Coulmas（1981）では、感謝表現の選択に影響する要因として「感謝の対象」をあげている。言語手段を通して表れるすべての感謝表現は恩恵を施した人によるある行為又はその行為の結果と関係がある。Coulmas（1981）ではこれを感謝の対象と呼び、それぞれ異なる 4 つの場面別カテゴリに区分している。なお、各場面は、(1) 感謝表現が使われた時点、(2) 感謝表現が使われた状況、(3) 感謝行動における依頼の有無、(4) 実際受けた恩恵の有無などに分けられており、各状況はさらに 2 つに細分化されている。まず、(1) 感謝表現が使われた時点については、感謝行動に対する「事前の感謝」と「事後の感謝」に分けられる。事前の感謝とはあらかじめ感謝の言葉を伝えることを言い、事後の感謝とは実際行われた感謝の状況に対して感謝表現を使う場合である。例えば、ある行事に招待を受けた場合、招待を受けたその時点で発話された「초대해 주셔서 감사합니다. (ご招待いただきありがとうございます。)」は事前の感謝に当たり、実際に行事に参加してから「초대해 주셔서 감사합니다. (ご招待いただきありがとうございます。)」と話すのは事後の感謝に当たる。次に、(2) 感謝表現が使われた状況は、贈り物のような「物質的なもの」に対する感謝なのか、それとも相手からの褒めや情報の提供など、「非物質的なこと」に対する感謝なのかに分けられる。(3) 感謝行動における依頼の有無は、特に依頼していないのに「相手側からの好意」で恩恵

を受けている状況なのか、それとも「自分の依頼や指示」などによって恩恵を受けた状況なのかに分けて場面設定が行われている。最後に(4) 実際受けた恩恵の有無の場合、レストランでの接客の場面などで機械的に発話される「ありがとうございます。」のように、実際には恩恵を受けていないのに発話されたものなのか、それとも実際相手から恩恵を受けて発話されたものなのかによって分けられている。

本調査では、相手の行動やその行動の結果により恩恵を受けた人が感情的負債を感じて感謝表現を伝える状況のみを対象にしているため、(1) まだ具体的な恩恵を受けていない事前の感謝や、(4) 接客のようなサービス場面で習慣的に発話される感謝表現は外した。そして、実際相手から恩恵を受けて発話される事後の感謝を前提条件に、(3) 物質の提供又は非物質的な行動に対する感謝表現、及び(4) 相手からの自発的な好意あるいは自分の依頼などに対する感謝表現を参考にし、DCTでの感謝の場面を表2のように「場面Ⅰ」と「場面Ⅱ」に分けて設けている。本研究では日韓の大学生における感謝表現の使い方を分析の対象としているため、大学生の日常生活の中で想定可能な感謝の場面を設定しようと心がけた。例えば、食事の御馳走は、韓国では普段目上の人からの好意で、あるいはお礼としてよく見かけられることであり、誕生日プレゼントは親しい友達同士でよくあり得る行為である。お礼の贈り物も、日韓ともに親しくない間柄でも想定できる行為である。

さらに本調査では、同じような場面でも社会的要因によって使われる感謝ストラテジーは変わる可能性があるということを想定し、上記の「場面Ⅰ」と「場面Ⅱ」を「社会的地位」、「親疎関係」、

「負担程度」(Brown & Levinson, 1987)の3つの要因に分け、表3のように全18問のDCTを作成した。なお、「場面Ⅰ」では負担程度の社会的要因を外しているが、本調査の対象である大学生の場合、物質的に負担になるような行為を施すことは難しいと予想されたためである。Brown & Levinson (1987)では、各文化の特殊性を構成するものとして、(1) 社会的な権威、(2) 社会的距離、(3) 負担程度など、3つの要素をあげている。社会的な権威とは、社会的地位の上下関係を、社会的距離とは話し手と聞き手の親疎関係をそれぞれ意味し、負担程度は話し手の発話内容が聞き手にどれだけ負担を与えるのかを指標する。その外、性別や年齢も文化を特殊づける要因となっているが、本調査は日韓の大学生を対象に行っているため、年齢の要因は分析の対象から排除した。なお、性別の要因も今回の調査が女性に偏っていたため分析の対象から外した。「教授」や「先輩」、「後輩」、「友人」など、大学生という身分を十分考慮して場面設定を行ったDCTの構成内容は表3の通りである。

表3のDCTの構成内容をもとに質問を作成しているが、紙面の都合上、その事例を一部紹介すると以下の通りである。

7. 今日筆箱を忘れたので横に座っている()にボールペンを貸してほしいと言い、()はボールペンを貸してくれました。この時の私の反応は？

(親しい友人)

(あまり親しくない友人)

(親しい後輩)

(あまり親しくない後輩)

(問 12)

(問 14)

(問 16)

(問 18)

表 2 感謝の場面

場面Ⅰ	物質的なもの に対する感謝	+	相手の自発的な好意 に対する感謝	⇒	相手の自発的な好意で 食事のご馳走、誕生日プレゼント、 お礼の贈り物をもらった場合
場面Ⅱ	非物質的なもの に対する感謝	+	自分の依頼などによる 結果に対する感謝	⇒	自分の依頼で助けてもらった場合

表3 DCTの構成内容

〔場面Ⅰ〕 相手の自発的な好意で食事の御馳走、誕生日プレゼント、お礼の贈り物をもらった場合

社会的地位	親疎関係	状 況	問
上 (教授)	親	親しい教授に昼食をごちそうになった。(食事)	1
	疎	あまり親しくない教授に昼食をごちそうになった。(食事)	2
同 (友達)	親	親しい友達に誕生日プレゼントでTシャツをもらった。(誕生日プレゼント)	3
	疎	以前助けてあげたあまり親しくない友達に旅行のお土産で携帯ストラップをもらった。 (お礼の贈り物)	4
下 (後輩)	親	親しい後輩に誕生日プレゼントでTシャツをもらった。(誕生日プレゼント)	5
	疎	以前助けてあげたあまり親しくない後輩に旅行のお土産で携帯ストラップをもらった。 (お礼の贈り物)	6

〔場面Ⅱ〕 自分の依頼で助けてもらった場合

社会的地位	親疎関係	負担程度	状 況	問
上 (教授)	親	大	親しい教授に留学に行くこととなった学校に通っている先輩に連絡し、紹介してもらった。	7
		小	親しい教授に勉強に役立つ本を紹介してもらった。	8
	疎	大	あまり親しくない教授が留学に行くこととなった学校に通っている先輩に連絡し、紹介してもらった。	9
		小	あまり親しくない教授に勉強に役立つ本を紹介してもらった。	10
同 (友達)	親	大	同じ下宿先の親しい友達に引っ越し荷物を運ぶのを手伝ってもらった。	11
		小	親しい友達に授業中にボールペンを貸してもらった。	12
	疎	大	同じ下宿先のあまり親しくない友達に引っ越し荷物を運ぶのを手伝ってもらった。	13
		小	あまり親しくない友達に授業中にボールペンを貸してもらった。	14
下 (後輩)	親	大	同じ下宿先の親しい後輩に引っ越し荷物を運ぶのを手伝ってもらった。	15
		小	親しい後輩に授業中にボールペンを貸してもらった。	16
	疎	大	同じ下宿先のあまり親しくない後輩に引っ越し荷物を運ぶのを手伝ってもらった。	17
		小	あまり親しくない後輩に授業中にボールペンを貸してもらった。	18

4. 分析結果

本章では、今回収集されたDCTで、集団や場面、社会的要因ごとに、日韓においてどのような感謝表現が用いられているのかを、ストラテジーという側面から分析した結果を提示する。特に場面による分析では、同じような場面でも社会的要因によって感謝ストラテジーがどのように変わるのかに注目して分析を行っている。

4.1 集団による分析

日韓の大学生における感謝表現のストラテジーを分析した結果、日韓両方において表4のように10パターンが表れた。各パターンを量的に分析した結果、日本人大学生では、定型表現(65%)>褒め、恩返し(各10%)>謝罪(5%)>喜びの表明(4%)>負担の表明(3%)>謙遜、冗談、確認(各1%)の順で、韓国人大学生では、定型表現(66%)>恩返し(19%)>褒め、負担の表明(各5%)>喜びの表明(2%)>謝罪、謙遜、

表 4 集団別の感謝表現ストラテジーの使用比較

感謝ストラテジー	日本人大学生		韓国人大学生	
	頻度	パーセント	頻度	パーセント
定型表現	632	65%	672	66%
喜びの表明	35	4%	22	2%
褒め	97	10%	49	5%
恩返し	98	10%	189	19%
負担の表明	29	3%	47	5%
謝罪	50	5%	6	1%
謙遜	9	1%	7	1%
冗談	5	1%	15	1%
確認	11	1%	3	0%
その他（非言語表現）	0	0%	3	0%
合計	966	100%	1013	100%

冗談，確認（各 1%）の順で表れた。

以下に各パターンの事例と使用傾向について紹介する。

4.1.1 定型表現

定型表現とは，感謝の場面で慣用的に用いられる挨拶言葉のことで，「ありがとうございます。」，「いただきます。」，「お疲れ様でした。」などがこれにあたる。日本人大学生の 65%，韓国人大学生の 66% から分かるように，日韓両方で最も多く選ばれている。定型表現の場合，単独で選ばれることもあるが，日本人大学生では「お気遣いありがとうございます。」，「手伝ってくれてありがとう。」，韓国人大学生では，「도와줘서 고마워. (助けてくれてありがとう。)」，「신경 써 주셔서 감사합니다. (気を遣ってくださってありがとうございます。)」，「바쁘신데 찾아 주셔서 감사해요. (お忙しいのにお越し頂きありがとうございます。)」のように，具体的な感謝の内容に伴って選ばれることもある。

4.1.2 喜びの表明

相手の行為やプレゼントなどについて喜んだり，嬉しい気持ちを素直に言葉で表したりするストラテジーのことである。「嬉しい！」，「すごい

好きな感じ。」，「こういうのほしかった！」，「覚えてくれたんだ。」や，「완전 마음에 들어. (すごく気に入った。)」，「내가 갖고 싶었던 것인데. (私が欲しかったものだけど。)」，「내가 좋아하는 디자인이야. (私の好きなデザインなの。)」，「안 그래도 하나 필요했는데. (ちょうど一つ必要だったんだ。)」などがこれにあたる。このストラテジーは，韓国人大学生（2%）に比べて日本人大学生（4%）の方でやや多く見られた。韓国人大学生の場合，主に贈り物を受け取った場面で見られたが，日本人大学生の場合，相手が頼み事を聞いてくれたり，昼食をごちそうしてくれたりしたときなどの行為に対しても見られた。そのほか，日本人大学生では「うれしい！」のように，喜びをそのまま言葉にするのが多く見られたのに対し，韓国人大学生では似たような表現があまり見られなかった。

4.1.3 誉め

これは，相手の行為やもらったプレゼントなどについて褒めることで感謝を表すストラテジーのことである。相手からプレゼントをもらった場合の，「素敵！」，「可愛い！」，「センスいいね。」や，「오! 귀엽다. (ああ，かわいい。)」，「너무 이쁘다. (すごくかわいい。)」，「우와~ 진짜 이쁘다. (うわ〜，本当にかわいい。)」，「너 센스 있다. (あ

なたセンスいいね。)」などがこれにあたる。そのほか、相手に何か手伝ってもらった場合は、「助かった!」、「とても助かりました。」、「お陰で早く終わったよ。」や、「덕분에 빨리 끝났어. (おかげですぐに終わった。）」、「혼자 도저히 안 됐는데…

(一人では到底できなかったのに…。)」, 「너 아니었으면 진짜 힘들 뻔했어. (君じゃなかったら本当に大変だったよ。)」などの表現も見られた。韓国人大学生(5%)に比べて日本人大学生(10%)の方で2倍も多く表れたが、特に「助かりました!」の表現は定型表現のように使われていた。

4.1.4 恩返し

これは、相手が施した恩恵を単に受け入れることにとどまらず、他の方法で恩返しすると約束する表現のことである。「何かおごるよ。」、「今度何かお礼するね。」、「今度私が御馳走するね。」や、「밥 살게. (ご飯おごるよ。）」, 「뭐 먹을래? (何食べる?)」, 「내가 한턱 쓸게. (私がおごるよ。）」, 「커피라도 제가 살게요. (コーヒーでも私が御馳走しますよ。）」, 「조만간 밥 한 끼 살게. (近いうちにご飯おごるよ。)」などがこれにあたる。韓国人大学生では、「이 은혜 내가 꼭 갚을게. (この恩は必ず返すよ。)」のように、恩返しの表現をそのまま言葉にする表現も見られた。日韓ともに何か補償するという約束の表現が選ばれているが、補償の時期については少し異なった表現を伴っている。すなわち、日本では「未来」、韓国では「今ここ」を恩返しの時点と想定しているのである。褒めの戦略とは逆に、韓国人大学生(19%)の方で2倍ほど多く見られた。

4.1.5 負担の表明

これは、相手の行為や苦勞に対して、「そこまでしてもらわなくてもよかったのに」と、相手の苦勞があまり過度なため、自分が相手に負担を感じているということを表明することである。「いいのに。」、「別にいいのに。」、「もらわなくてもいいのに。」、「大丈夫なのに。」「氣を使わなくてもいいのに。」や、「안 그래도 되는데…。 (そうしなくてもいいのに…。)」, 「안 사 줘도 되는데…

(買ってくれなくてもいいのに…。)」, 「아이고 ~필 이런 걸 다~. (やれやれ何でこんなものを。)」, 「헐~ 이런 거 안 챙겨줘도 되는데. (え? こんなのくれなくてもいいのに。)」などがこれにあたる。日本人大学生では3%, 韓国人大学生では5%がこの戦略を使うと回答した。

韓国人大学生では、「그냥 오지. 필 이런 걸 사 왔어? (手ぶらでいいのに。何でこんなもの買って来たの?）」と、日本人から見ると一見相手を責めるような表現も見られるが、これは相手の苦勞を強調することによって自分が受けた恩恵が大きいことを示す感謝表現で、韓国では頻繁に使われる感謝表現である。

韓国人と日本人の贈り物文化と感謝表現について考察した金(2005)では、「그냥 오지. 필 이런 걸 사 왔어? (手ぶらでいいのに。何でこんなもの買って来たの?）」のような表現は日本人には見られなかったと記述している。その点に注目し、DCTの調査時、追加項目として次のような質問をして、各集団は実際どのように感じているのか、各集団の認識度について調査することにした。実際行ったDCTの事例は以下のとおりである。尚、DCT実施にあたって、日本人大学生には日本語で、韓国人大学生には韓国語で作成したDCTをそれぞれ配布した。

友人が自分を下宿に招待しました。それで小さなケーキを買って行きました。下線の付いた言葉に対してどのように考えるか①～⑤のいずれかを選んで○印をしてください。④または⑤を選択した場合、なぜそのように考えるのか理由を書いてください。

私 : 「작은 케이크 하나 사 왔어. 이따가 같이 먹자. (小さなケーキ一つ買って来たよ。後で一緒に食べよう!」 友達 : 「그냥 오지. 필 이런 걸 사 왔어. (手ぶらでいいのに。なんでこんなものを買ってきたの。)」
--

分析の結果、韓国人大学生は「礼儀正しい(75%)」>「普通(20%)」>「失礼だ(5%)」のように殆どの大学生が肯定的に評価しているのに対して、日

本人大学生では「礼儀正しい (24%)」>「普通 (28%)」>「失礼だ (48%)」のように半分近くの学生が否定的に評価していた。日本語と韓国語の文法や表現が似通っているため、韓国語の表現を全て日本語に直訳しやすい日本人の韓国語学習者に対して、今後綿密な指導が必要だと思われる。

4.1.6 謝罪

これは、与えられた状況が相手に迷惑をかけたと思い、「ごめんね。」「申し訳ない。」「ごめんね、手伝わせて。」「미안해. (ごめんね。)', 「이런 부탁해서 미안해. (こんなお願いしてごめん。)」など、謝罪の表現が用いられることを表す。韓国人大学生の使用頻度は1%でかなり低く、日本人大学生 (5%) で多く見られた。金 (2005) は、韓国人が感謝の場面で謝罪の表現を全く使っていないと主張しているが、今回の調査によると、韓国人も相手への負担が大きい場面では謝罪のストラテジーを駆使することがうかがえる。

4.1.7 謙遜

これは、相手のためにやった行為は大したことではなかったといい、自ら自分を下げることで感謝表現をするストラテジーである。通常自分から何かの理由で施した行動について感謝の気持ちを感じた相手が言葉や物などで好意を見せたときに使われる。日韓ともにお礼の贈り物を渡した状況で選ばれており、「大したことじゃないのに。」「별 거 아니었는데…。 (大したことじゃなかったのに…。)」、 「힘든 일도 아니었는데…。 (大変なことでもなかったのに…。)」、 「대단한 일 한 것도 아닌데…。 (大したことをやってなかったのに…。)」などの表現がこれにあたる。

4.1.8 冗談

これは、相手が施した恩恵については特に触れず、「무슨 티셔츠고, 다른 거 없냐? (Tシャツって何だ, 他にはないの?)」と、冗談の形で反応するストラテジーのことで、主に親しい間柄で用いられる。冗談は、コンテクストへの依存度が高く、言葉共同体 (speech community) の構成員同

士の暗黙的ルールによって使用・解釈される文化的行為である。Tシャツをプレゼントした相手に、他のプレゼントまで要求するという、友人同士でよく見られる表現は、異なる文化圏の人から見るときわめて失礼で、人間関係を構築するどころか、逆に破綻へ繋がる可能性もある。しかし、親しい間柄の韓国人にとってこの表現は、恩恵という負担によって偏ってしまった人間関係のバランスを調整し、ごちない状況や場面を和らげる役割を果たす発話行為として解釈されるのである。韓国人大学生では、これ以外にも「와~진짜 티셔츠가 뭐냐! (わー, 本当Tシャツって何だよ!)」なども友人同士の場面で見られた。大学の教授に対しては、「교수님, 충성! 충성! (先生, 忠誠, 忠誠!)」などの冗談も見られた。「충성! (忠誠)」という言葉は、韓国では普段軍隊で上司に対する挨拶として使われているが、女性を含めて一般人の間では先輩や友人のほか、目上の関係でも親しい間柄で冗談として使われている。日本人大学生では、「さすが優しい人は違うね。」「ちゃんと返すから安心して。」「また御馳走してください。」などの冗談のストラテジーが友人や目上の関係で見られた。日韓ともに比率は1%と低く表れているが、他のストラテジーに比べ誤解を招く可能性が高いため、教育現場で十分説明する必要があるだろう。

4.1.9 確認

確認とは、相手の恩恵が本当に自分に向けられているかを確認するために使われる表現のことである。施した恩恵を負担に感じたり、喜んで受け入れる時に改めて相手に確認するストラテジーである。「本当にいいの?」「私にくれるの?」「나 주는 거야? (私にくれるの?)」などの表現がこれにあたる。なお、「こんなのもらっちゃっていいの?」「이런 거 받아도 될지 모르겠네. (こんなのもらっていいのかな。)」など、自分はその恩恵を受ける資格がないのに与えるのかという表現も日韓で見られた。

4.1.10 その他 (非言語行動)

感謝という行為は、微笑みや頷きなど、言葉以

外の手段を通して表現される。今回収集したデータは自然談話ではないため、感謝する場面において非言語行動がどのように表れているのかを綿密に観察することはできない。ただ、「言葉ではなく態度で表現する場合はどのような態度を示すのか」という質問に対して、日本人大学生は0名、韓国人大学生では3名が非言語行動で済ますと回答した。今回の調査では、男子の学生が親しい友達や後輩に対して負担程度がそれほど高くはない依頼に対して「무응답（無応答）」と回答している。上下・親疎関係や負担程度、性別によって異なっていることもあるが、日韓ともに、感謝は言葉を通して伝えるという意識が強いことがうかがえる。

4.2 場面による分析

前節ではどのような感謝ストラテジーが日韓で選ばれているのかを述べたが、10パターンの感謝ストラテジーが場面によってどのように用いられているのかを明らかにすることは、社会的地位や上下・親疎関係に敏感な日韓においてきわめて重要である。話し手によって駆使されるストラテジーは場面や状況によって流動的に変わるものであり、当然ながら望ましい或いはふさわしいと思われるストラテジーも言葉共同体によって異なっている。本節では、日韓の大学生がDCTにおいて設定した様々な場面で、どのようなストラテジーをそれぞれ選んでいるかについて分析を行う。本調査では場面と社会的要因の組み合わせによるストラテジーの使い分けを詳しく見るため、まず「場面Ⅰ」相手の自発的な好意で恩恵を受けた場合と、「場面Ⅱ」自分の依頼で助けてもらった場合に大きく分け、さらに各場面を社会的地位、親疎関係、負担程度の社会的要因を考慮したいくつかの状況に分けて分析を行った。

4.2.1 相手の自発的な好意で恩恵を受けた場合

これは、自分からは何も頼んでないが、相手側から好意を持って恩恵を施してくれた場面のことである。「物質」を提供することで好意を見せる状況を設け、(1) 好意で食事の御馳走してもらっ

た場合、(2) 好意で誕生日プレゼントをもらった場合、(3) 好意でお礼の贈り物をもらった場合の3つに分けてそれぞれ分析を行った。

4.2.1.1 好意で食事の御馳走してもらった場合

これは自分より社会的地位が高い教授から好意で食事の御馳走してもらった状況で、その教授との関係が親しいときとあまり親しくないときの感謝表現を書くようにした（問1と問2）。

1. () に伝えることがあり、教授の研究室に行きました。ちょうど昼食時間だったので、教授が昼食を御馳走してくれました。昼食を終えた後の私の反応は？
(親しい教授) _____ (問1)
(あまり親しくない教授) _____ (問2)

分析の結果、日韓両方で「ありがとうございます。」などの定型表現が90%以上選ばれていた。定型表現以外に、「恩返し」のストラテジーも日韓で約5%程度で表れ、その他の表現は全く見られなかった。日韓ともにあまり親しくない間柄では定型表現の使用率がさらに高く選ばれた。なお、他のストラテジーとの組み合わせは日韓の両方であまり見られなかった。教授と学生という、社会的地位や上下関係がはっきりとした間柄では、親疎の要因と関係なく、感謝はしっかり儀礼化した表現を使って伝えるという認識が日韓で共通していると考えられる。

4.2.1.2 好意で誕生日プレゼントをもらった場合

これは親しい間柄で、社会的地位の同じである友人と社会的地位の低い後輩から誕生日プレゼントをもらった状況で、それぞれの感謝表現を書くようにした（問3と問5）。親しくない間柄では、特別な理由がない限り誕生日プレゼントをあげたりもらったりすることはないため、親しくない場合はDCTに含めていない。

2. 今日は私の誕生日です。() が誕生日プレゼントをくれ、開けてみるとTシャツでした。この時の私の反応は？
(親しい友人) _____ (問3)
(親しい後輩) _____ (問5)

分析の結果、図1のように、日韓ともに「定型

表現」と「喜び」、あるいは「定型表現」と相手への「褒め」を組み合わせることで応答することが多かった。しかし、ここでは紙面の都合上、「友人」と「後輩」の場合をそれぞれ分析した結果を紹介できず平均値だけを図1で表しているため分かりづらいが、韓国人大学生では、「負担の表明」のストラテジーが、「友人」の場合は全く選ばれていないのに対して、「後輩」の場合は約28%と多く選ばれていた。その反面、日本人大学生では、「負担の表明」のストラテジーが「友人」の場合は約3%、「後輩」の場合は約5%に選ばれていて、友人と後輩の違いがそれほど大きくなかった。これは、年齢という要因に敏感な韓国社会の特殊性を反映しているものと考えられる。つまり、韓国社会で先輩という存在は後輩に恩恵を与えるべきなの

に、むしろ後輩に負担を与えてしまい申し訳ないという気持ちに起因していると考えられる。

4.2.1.3 好意でお礼の贈り物もらった場合

これはあまり親しくない間柄で、社会的地位が自分と同じである友人と自分より低い後輩からお礼の贈り物を受け取った状況で、それぞれの感謝表現を書くようにした（問4と問6）。

3. 先日（ ）が授業中に分からなかった部分を授業後に教えてあげました。（ ）があの時はありがとうございました。旅行の土産に携帯電話ストラップをくれました。この時の私の反応は？
 (あまり親しくない友人) _____ (問4)
 (あまり親しくない後輩) _____ (問6)

分析の結果、図2のように、日韓大学生の両方

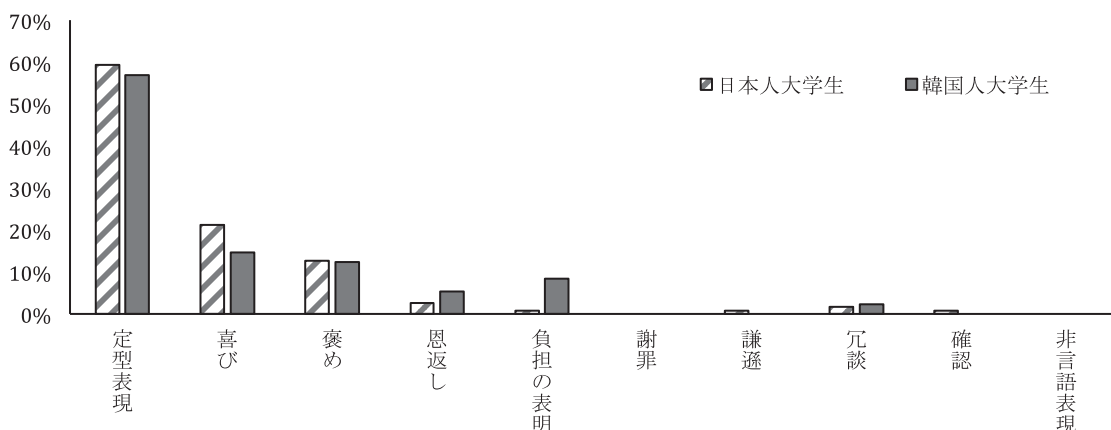


図1 「好意で誕生日プレゼントもらった場合」の感謝ストラテジー

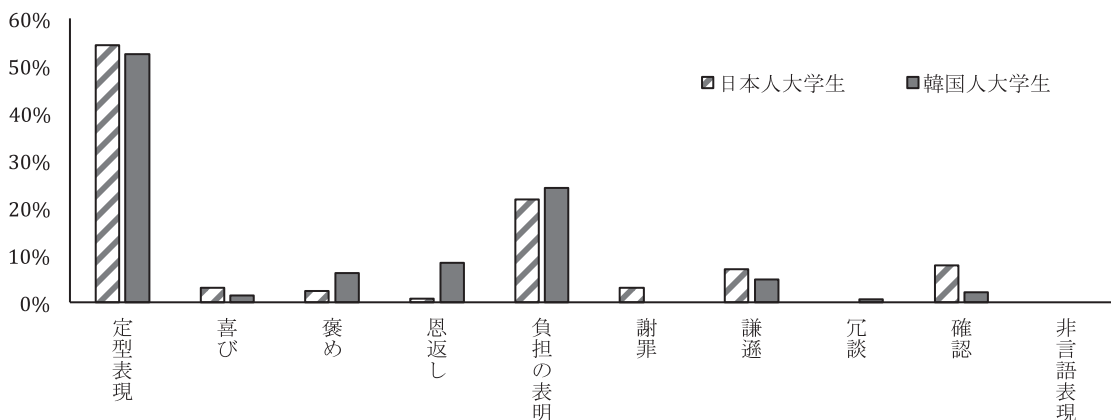


図2 「好意でお礼の贈り物もらった場合」の感謝ストラテジー

で「定型表現」と「負担の表明」のストラテジーを組み合わせで応答することが最も多かった。あまり親しくない人から贈り物をもらうことについて、日韓ともに負担を感じていることがわかる。その他、日本人大学生では、親しくない後輩からお礼の贈り物をもらった時に「謝罪」のストラテジーが見られたが、韓国人大学生では全く表れていない。さらに韓国人大学生では、友人よりも後輩からお礼の贈り物を受け取った場合、「恩返し」を提案するストラテジーが頻繁に選ばれていたが、前で述べたように年齢を重視する韓国社会の一面がうかがえる。

4.2.2 自分の依頼で助けてもらった場合

これは、相手に何かを依頼して助けてもらった状況のことで、社会的地位（上・同・下）、親疎関係（親・疎）、負担程度（大・小）を考慮して以下のようなDCTを行った。紙面の都合上、以下の一部のみ紹介したい。

6. 今日引越した際に一人で荷物を運ぶのが大変だったので、同じ下宿に住む（ ）に引っ越し荷物を車に運ぶのを手伝ってほしいとお願いしました。（ ）は引っ越し荷物を運ぶのを手伝ってくれました。この時の私の反応は？

(親しい友人) _____ (問 11)
(あまり親しくない友人) _____ (問 13)
(親しい後輩) _____ (問 15)
(あまり親しくない後輩) _____ (問 17)

表5は、親しい友人に依頼して助けてもらった状況について分析したもので、負担程度は高いレベルにあたる（問11）。このような状況で、定型

表現以外で好まれているストラテジーは、日韓とも「恩返し」であった。しかし、恩返しの時点は少し異なっている。日本人大学生は「今度〇〇するね。」のように今後の補償を約束する回答が多かったのに対して、韓国人大学生では「뭐 먹고 싶어? (何食べたい?)」、「밥 살게. (ご飯おごるよ。)」のように今早速あるいはその日のうちに、主に食事で補償しようとする表現が多く選ばれていた。なお、日本人大学生では相手の恩恵の大きさをほめる「助かった!」という回答が多かった。

表6は、あまり親しくない友達に依頼して助けてもらった状況で、負担程度は低いレベルにあたる（問14）。このように負担程度が低い状況で、韓国人大学生では「定型表現」が95%で圧倒的に多く選ばれていた。一方、日本人大学生でも「定型表現」が頻繁に選ばれているが、「ごめんね。」のような「謝罪」も「定型表現」に代わって高い頻度で選ばれていた。

そのほか、ここでは紙面の都合で分析結果は紹介していないが、親しくない相手に自分の依頼で助けてもらった状況では、韓国人大学生も僅かながら「謝罪」のストラテジーを使用していると回答した。特に、親しくない間柄で負担程度が高い場合、このような傾向を示していた。なお、相手が親しい友達で負担程度が低い場合、韓国人大学生では「定型表現」はあまり用いられず、「冗談」や「非言語表現」に代わる傾向が高かった。一方、日本人大学生では同じような状況で「謝罪」の頻度が低く、その代わりに「助かったよ。」など「褒め」のストラテジーが多く選ばれていた。

表5 状況による感謝ストラテジー（問11）

状況：同じ下宿に住む親友に引っ越し荷物を運ぶのを手伝ってもらった。
社会的地位：話し手＝聞き手，親疎関係：親，負担程度：大

	定型表現	喜び	褒め	恩返し	負担の表明	謝罪	謙遜	冗談	確認	非言語表現	合計
日本人大学生	34	0	16	20	0	1	0	0	0	0	37名
	48%	0%	23%	28%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	100%
韓国人大学生	34	0	6	31	0	0	0	2	0	0	40名
	47%	0%	8%	42%	0%	0%	0%	3%	0%	0%	100%

表 6 状況による感謝ストラテジー（問 14）

状況：あまり親しくない友達に授業時間にボールペンを貸してもらった。

社会的地位：話し手＝聞き手，親疎関係：疎，負担程度：小

	定型表現	喜び	褒め	恩返し	負担の表現	謝罪	謙遜	冗談	確認	非言語表現	合計
日本人 大学生	36 73%	0 0%	2 4%	0 0%	0 0%	11 22%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	36 名 100%
韓国 人大学生	37 95%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	1 3%	0 0%	1 3%	0 0%	0 0%	39 名 100%

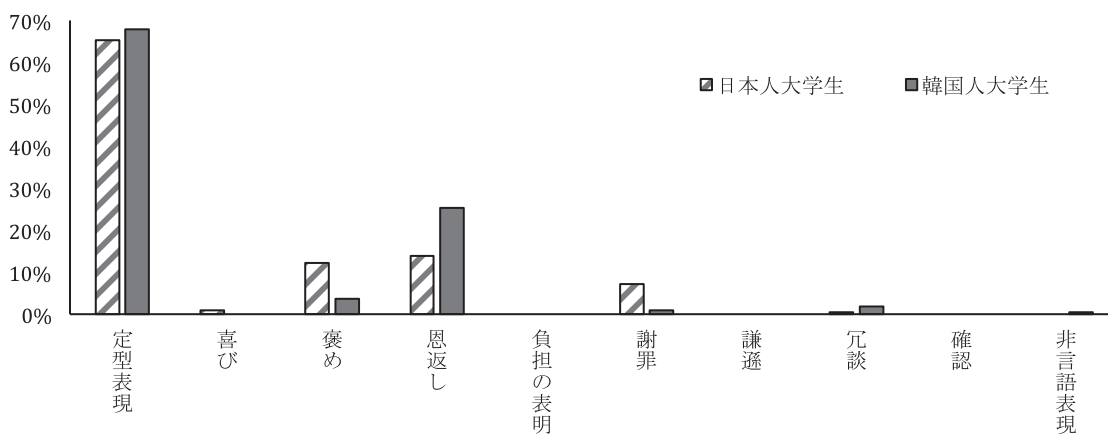


図 3 「何か依頼して助けてもらった状況」の感謝ストラテジー

図 3 は、自分の依頼で助けてもらった場合をまとめたものである。この状況において日本人大学生では定型表現（65%）＞恩返し（14%）＞褒め（12%）＞謝罪（7%）＞喜び（1%）の順で、韓国人大学生では定型表現（68%）＞恩返し（25%）＞褒め（4%）＞冗談（2%）＞謝罪（1%）の順で、感謝ストラテジーが選ばれていた。日韓ともに定型表現が 60% 以上を占めて高い頻度で表れている。しかし、「恩返し」は韓国人大学生が日本人大学生の 2 倍ほど高く、「褒め」は日本人大学生が韓国人大学生の 3 倍も高く回答が多かった。この結果を通じて自分の依頼で助けてもらった場合、「定型表現」を除き、日韓の大学生に好まれるストラテジーが異なっていることが分かる。

4.3 社会的要因による分析

本節では、社会的地位，親疎関係，相手への負

担程度といった社会的要因が感謝ストラテジーの選択に与える影響について日韓の大学生でどのように共通・相違しているのかを各集団に分けて分析を行う。前節では、場面に重点をおき、同じような場面でも社会的要因によって変わる感謝ストラテジーの分析を行ったが、本節では、社会的要因が感謝ストラテジーの選択においてどう影響するかを見るために、場面を排除し、社会的要因のみに重点を置いて分析を行った。

4.3.1 社会的地位による分析

図 4 は、日本人大学生の社会的地位による感謝ストラテジーの変化について分析したものである。日本人大学生では、相手の社会的地位が自分より高い場合「定型表現」が最も多く選ばれ、「恩返し」がその後を継いだ。留学先などを紹介してもらった教授と学生の場面では、教授に向けて「一

生懸命勉強します。」というこれからの行為についての決意表明や約束を示す内容の応答が多かった。相手の社会的地位が自分と同じか低い場合は有意味な違いは見えなかった。この場合は定型表現の使用は減少し、その代わりに「褒め」、「負担の表明」、「謝罪」などのストラテジーが増加した。

図5は、韓国人大学生の社会的地位による感謝ストラテジーの変化を分析したものである。韓国人大学生では、相手の社会的地位が自分より高い場合、日本人大学生と同じく「定型表現」が最も多くみられ、「恩返し」がその後に続いた。日本人大学生では、社会的地位が同じあるいは低い場合は有意味な違いは無かったが、韓国人大学生で

は相手の社会的地位が自分より低い場合、「恩返し」や「負担の表明」のストラテジーが増加し、自分と同じ場合は「喜び」や「褒め」、「冗談」のストラテジーがさらに増加するなど、有意味な違いが表れた。「謝罪」と「謙遜」は、相手の社会的地位が自分と同じか低い場合、若干増加した。

4.3.2 親疎関係による分析

図6は、日本人大学生の親疎関係による感謝ストラテジーの変化を分析したものである。親しい間柄では「定型表現」以外に「恩返し」、「褒め」、「喜び」の順で多く選ばれた。一方、親しくない間柄では「謝罪」や「負担の表明」がさらに増加

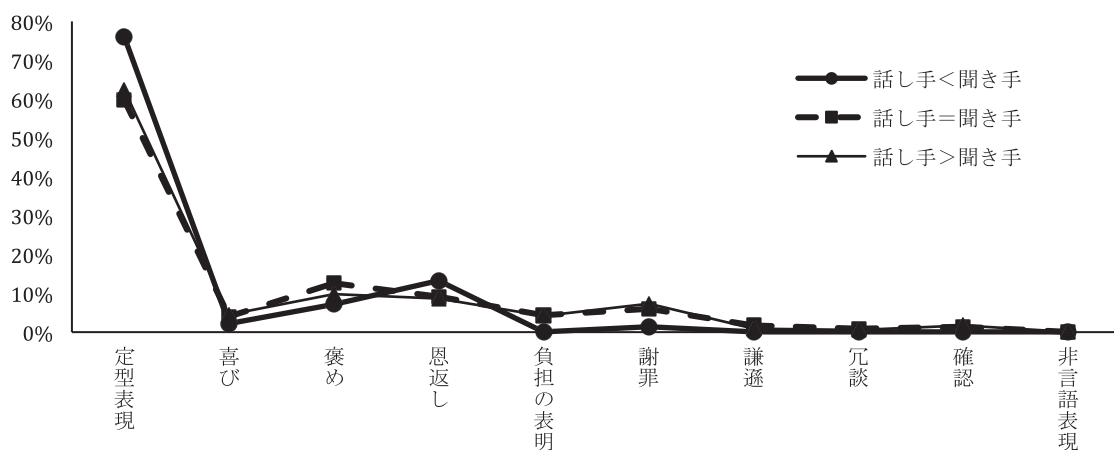


図4 社会的地位による感謝ストラテジー（日本人大学生）

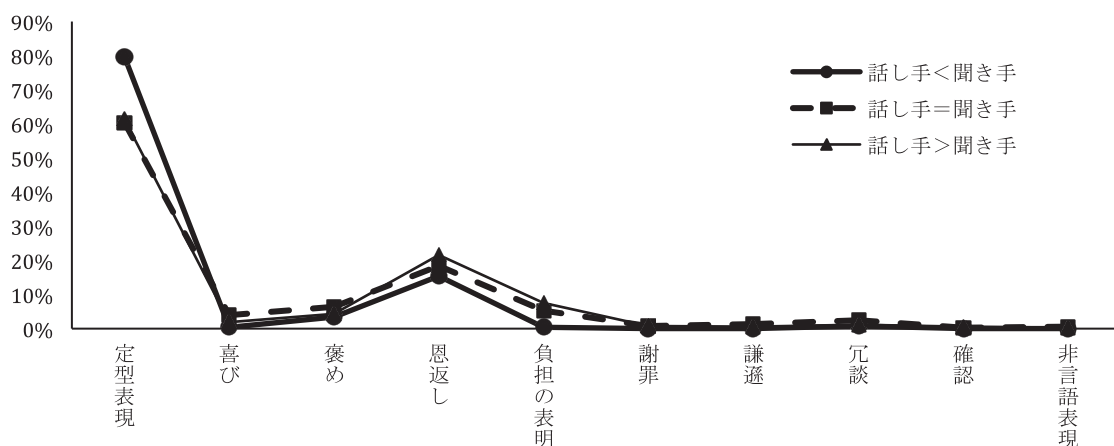


図5 社会的地位による感謝ストラテジー（韓国人大学生）

し、「謙遜」と「確認」も若干高くなっていることがわかる。

図7は、韓国人大学生の親疎関係による感謝ストラテジーの変化を分析したものである。親しい間柄では「定型表現」以外に「恩返し」が最も多く見られ、次に「褒め」、「喜び」、「冗談」の順で選ばれていた。親しくない間柄では「負担の表明」が大きく増加し、「謝罪」や「謙遜」なども若干増加した。日本人大学生と殆ど同じような傾向が見られているが、日本人大学生では、親しくない間柄で「謝罪」が大きく増加したのに対し、韓国人大学生では同じような状況で有意意味の違いはな

い範囲で若干増加している。なお、親しい間柄では、日本人大学生に比べ韓国人大学生の方で「冗談」の頻度が高く表れている。

4.3.3 負担程度による分析

図8は、日本人大学生の負担程度による感謝ストラテジーの変化を分析したものである。相手への負担程度が高い場合は、「定型表現」以外に「恩返し」と「褒め」が多く選ばれていた。一方、負担程度が低い場合は「定型表現」が大幅に増加し、「謝罪」の頻度も高くなっている。負担程度が低い場面で「謝罪」のストラテジーが高くなっていることから、日本語における「謝罪」の感謝スト

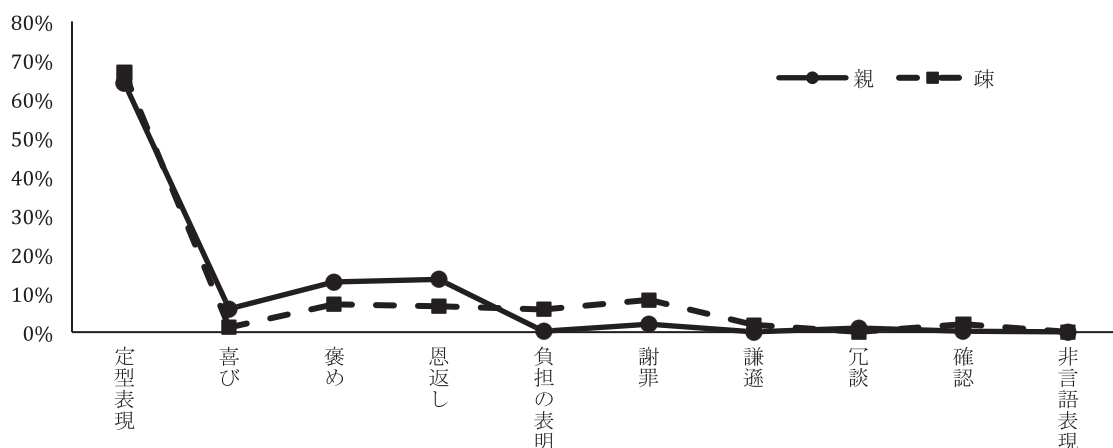


図6 親疎関係による感謝ストラテジー（日本人大学生）

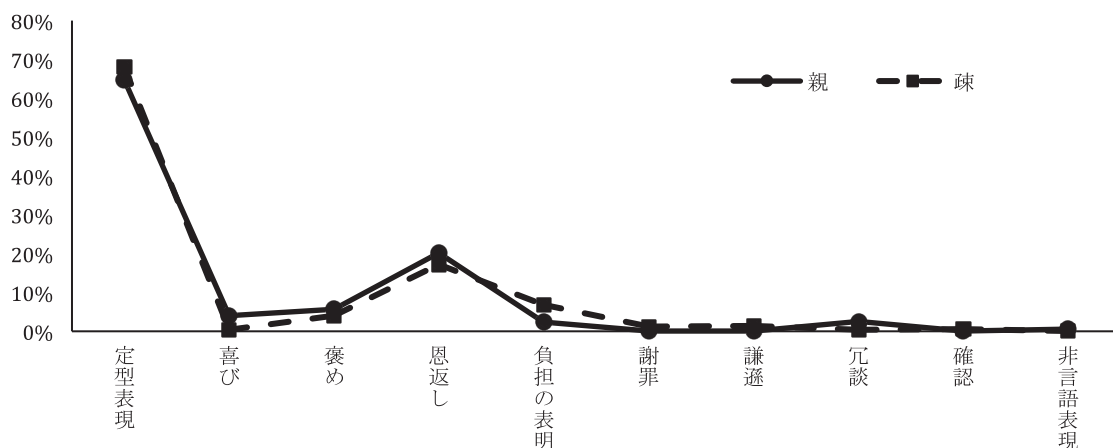


図7 親疎関係による感謝ストラテジー（韓国人大学生）

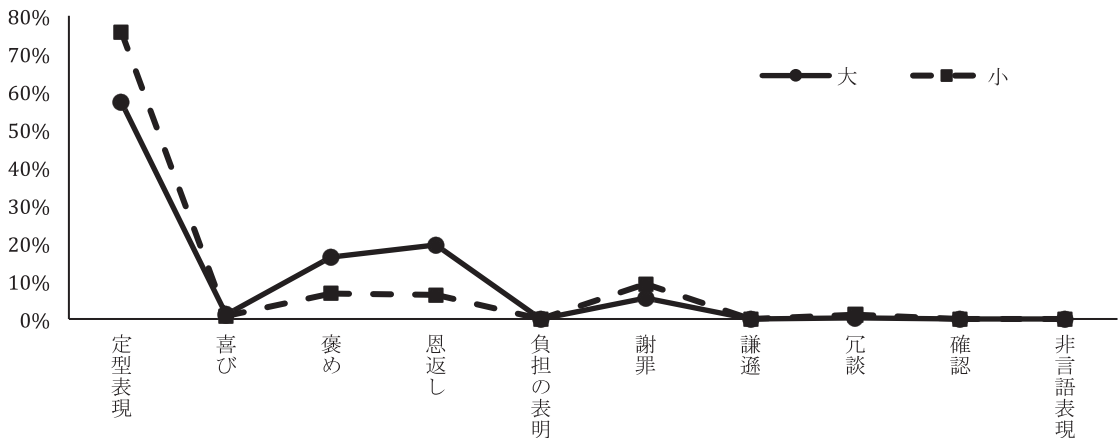


図8 負担程度による感謝ストラテジーの使用（日本人大学生）

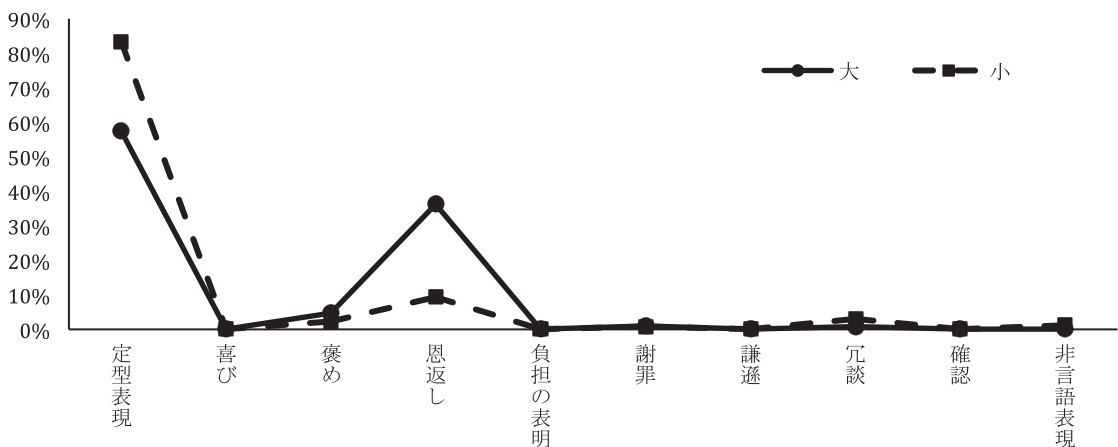


図9 負担程度による感謝ストラテジーの使用（韓国人大学生）

ラテジーは、申し訳ないほどのありがたさというより、今や定型表現の一つとして定着化していることがうかがえる。

図9は、韓国人大学生の負担程度による感謝ストラテジーの変化を分析したものである。相手への負担程度が高い場合、「定型表現」以外に「恩返し」と「褒め」の順で多く選ばれている。一方、負担程度が低い場合では「定型表現」が大幅に増加し、「冗談」と「非言語表現」も有意味な違いは無い範囲ではあるが、若干増加している。「恩返し」は、負担程度が高い場合で日韓ともに増加しているが、韓国人大学生の方でより高くなっている。負担程度が高い恩恵を受けた際に、韓国

大学生は日本人大学生に比べて恩返しへの負担をより感じていることがうかがえる。

5. 考察

第4章では、日韓の大学生における感謝表現をストラテジーという観点から集団、場面、社会的要因ごとに分析を行っているが、その結果から以下のことがうかがえる。

まず、〈集団による分析〉では、日本人大学生では、「褒め」と「喜びの表明」が韓国人大学生より2倍ほど多く見られたが、これにより日本人は感謝の場面で韓国に比べて言葉を通して十分

感謝の気持ちを伝えようとする傾向があることがうかがえる。特に「助かりました。」という表現が多く選ばれているが、感謝の場面において定型表現として定着しているように見える。「謝罪」のストラテジーは韓国人大学生に比べて日本人大学生の方で5倍も多く選ばれていた。一方、韓国人大学生では、「恩返し」のストラテジーが日本人大学生に比べて約2倍程度多く見られた。また、感謝表現として韓国で広く使われている「그냥 오지. 뭘 이런 걸 사 왔어. (手ぶらでいいのに。何でこんなものを買って来たの?)」という「負担の表明」は、韓国人大学生では礼儀正しいと認識されていたのに対して、日本人大学生では相手を非難する否定的な表現として認識されていたため、今後日本人韓国語学習者に向けて適切な指導を行う必要があるだろう。なお、これまでの先行研究では、韓国人は感謝の場面で「謝罪」ストラテジーを用いていないと述べているが、本調査によると、韓国人でも場面によって「謝罪」のストラテジーが低い頻度で見られた。そのほか、「冗談」のストラテジーが日韓ともに低い頻度で表れているが、冗談の使い方は日韓で少し異なっている。例えば、韓国人大学生では「충성! 충성! (忠誠, 忠誠!)」のように軍隊で用いられるような表現が男性だけでなく女性の間でも冗談として選ばれているが、このような表現は韓国特有の文化を反映したもので、特定場面における言語ストラテジーを正しく理解してもらうためには、当然ながらその土台となる文化の教育を伴う必要があるだろう。

次に、〈場面による分析〉では、同じような場面や状況でも、社会的地位や親疎関係、負担程度といった社会的要因に応じて感謝のストラテジーがどのように変わってくるのかについて分析を行ったが、全場面において日韓で最も高い頻度で選ばれていたのは「고맙습니다. (ありがとうございます。)」, 「감사합니다. (感謝します。)」などの「定型表現」であった。特に、「相手の自発的な好意で食事を御馳走してもらった場合」では、「教授から食事を御馳走してもらった場合」など、社会的地位や上下関係をはっきりしている場面

で、日韓ともに90%以上の高い頻度で「定型表現」が選ばれていた。なお、教授との関係が親しくない場合では日韓ともに97%以上の頻度で「定型表現」が選ばれているが、相手との距離があればあるほど「定型表現」を用いる傾向があるとうかがえる。なお、「相手の自発的な好意でプレゼントをもらった場合」、日韓の大学生は「定型表現」と「喜びの表明」、あるいは「定型表現」と「褒め」のストラテジーを組み合わせる回答する頻度が高かった。ただ、韓国人大学生では後輩に対して「負担の表明」を使用するという回答が最も高い頻度で表れている。これは、年齢という要因に敏感な韓国社会の一面を反映したもので、目上の人として後輩に恩恵を施すところか、返って負担を与えてしまったという申し訳ない気持ちに起因していると考えられる。次に、「相手の好意でお礼の贈り物をもらった場合」、日韓大学生の両方で「定型表現」と「負担の表明」のストラテジーを組み合わせる回答する頻度が最も高かった。しかし、同じ場面でも親疎関係や社会的地位における使い分けは日韓で異なっている。すなわち、相手が親しくないかと判断し、かつ自分より社会的地位が低い場合、日本人大学生では「謝罪」のストラテジーが、韓国人大学生では「恩返し」のストラテジーがそれぞれ高い頻度で選ばれており、人間関係の維持や構築、修復に向けての優先順位における日韓の違いがうかがえる。すなわち、日本では「謝罪」を通して相手との距離を置くストラテジーを優先する反面、韓国では「恩返し」を約束することで、負担をかけたことによって離れた相手との距離を修復しようとするストラテジーが優先していると考えられる。なお、「自分の依頼で助けてもらった場合」、日韓大学生では「定型表現」と「恩返し」のストラテジーの組み合わせが最も高い頻度で見られた。しかし、日本人大学生では今後の補償を約束する回答が多く見られたのに対して、韓国人大学生では今早速、あるいはその当日に食事などで補償したいという回答が多く見られ、補償の時期の設定においては日韓で異なっていることがわかる。さらに、同じような場面でも日韓の大学生ではそれぞれ異なるストラテジーが好まれ

ていた。すなわち、自分の依頼で助けてもらった場面で、韓国人大学生では「恩返し」のストラテジーが日本人大学生の2倍ほど多く選ばれていたのに対して、日本人大学生では「褒め」が韓国人大学生の3倍ほど高い頻度で選ばれていた。ここでも「恩返し」というストラテジーが韓国側で多く見られているが、「いくら親しくても恩は返すべきだ」という意識が韓国人大学生で広く表れていることがうかがえる。

最後に、〈社会的要因による分析〉では、場面や状況を排除し、社会的地位、親疎関係、負担程度といった社会的要因のみに重点をおいて分析を行っているが、相手の社会的地位が自分より高い場合、日韓の大学生には「定型表現」が最も多く選ばれ、同じ傾向が見られた。ただ、日本人大学生では相手の社会的地位が自分より同じか低い場合は有意な違いは見えなかったのに対して、韓国人大学生では相手の社会的地位が自分より低い場合は「恩返し」と「負担の表明」がさらに増加していた。これは韓国社会における社会的地位と年齢の関係を反映したもので、年齢という要素が韓国文化において社会的地位に強く影響していることを指標するといえる。すなわち、韓国人は「恩は目上が目下に施すもの」と認識しており、自分より目下の人から恩恵を受けた場合は他の方法で恩返しをすることによって、目上としての自分の社会的地位を修復しようとする傾向が強いと考えられる。「親疎関係」と「負担程度」による感謝表現の分析では、日韓の大学生で有意な違いは見えなかった。ただ、負担程度が高い場合、韓国人大学生では「恩返し」のストラテジーが日本人大学生より2倍近く高い頻度で表れていた。「恩返し」は特に韓国人大学生の間でより高い頻度で広く選ばれているが、場面による分析結果でも提示しているように、韓国人大学生は「負担程度」に応じて恩を返すことによって、人間関係をもとの位置に戻したいというストラテジーを好んでいることがうかがえる。一方、「謝罪」のストラテジーは日本人大学生の間で広く選ばれているストラテジーであった。相手の社会的地位が自分と同じか低い場合、親しくない場合、日本人大学生では「謝

罪」のストラテジーがより高い頻度で選ばれていた。特に、負担程度が低い場合でも「謝罪」のストラテジーが頻繁に見られており、「謝罪」の感謝ストラテジーは、申し訳ないほどのありがたさというより、今や定型表現の一つとして定着していることがうかがえる。一方、韓国人大学生でも「謝罪」のストラテジーが低い頻度で選ばれていたが、韓国では、相手の社会的地位が自分と同じか低い場合、親しくない場合に限って表れていた。これまでの先行研究では、韓国人は感謝の場面で「謝罪」表現は用いないとされていたが、本研究では低い頻度で選ばれていたため、今後自然談話の収集を通して研究をさらに発展していく必要があるだろう。

6. 本研究の示唆点、限界および今後の課題

本研究は、韓国語を学習する日本人学習者が、韓国の文化や社会が持っている特殊性を理解し、様々な場面や状況に応じて適切な感謝表現を駆使することができるよう手助けするために考案された。その目的を達成するために、本稿ではいくつかの感謝の場面を設けたDCTを作成し、社会的要因によって感謝表現がどのように使い分けられているのかについて分析を行った。分析の結果、日韓では同じような場面でも社会的要因によって好まれる感謝ストラテジーが異なっていることがわかった。なお、韓国社会で広く採用されている感謝のストラテジーが、日本人学習者にとっては「感謝」ではなく「無礼」な印象を与え、誤解を招く可能性があるということも提示された。この結果を踏まえ、今後韓国語の教材を開発する際には以下の2点を考慮して作成する必要があるだろう。

第1に、韓国語の教材は様々な談話の状況を中心に社会的地位や親疎関係、負担程度などといった社会的要因を考慮して対話文を提示する必要がある。感謝ストラテジーはいつ、誰に、どのような状況について感謝するのかによって異なって用いられているためである。

第2に、中級レベル以上の教材では、定型表現以外の感謝表現についても提示する必要がある。

これまで作成された韓国語教材で取り扱っている感謝表現は、「감사합니다. (感謝します。)」や「고맙습니다. (ありがとうございます。)」のみにとどまっているが、これだけでは「인사성 (挨拶性)」を大事にしている韓国の人々に「物足りない」という印象を与える可能性も無いわけではないためである。本稿でも提示されているように、感謝表現は定型表現とその場面に特化した表現の組み合わせによって発話される場合が多い。したがって、定型表現以外の感謝表現も適切な挨拶表現として習得させていく必要があるだろう。

本研究にはいくつかの限界がある。本稿で分析の対象となっているものは実際行われた自然談話ではなく DCT による疑似談話にあたるため、自然談話で観察できる非言語やパラ言語を網羅して分析することができなかった。なお、本稿ではデータ収集の容易性から日韓の大学生のみを調査対象にしており、様々な社会的要因による感謝表現の使い分けを十分反映したとは言い難い。そのほか、今回は調査対象が、特に日本の場合、女子学生に偏っており、性別による使い分けの傾向は分析できなかったが、性別という要素も分析結果に影響する可能性があるため、それを考慮した研究デザインを導入する必要がある。また、今回は日韓の大学生における感謝行動の傾向を見るために DCT を収集して分析を行っているが、量的研究にしては調査集団の規模が小さかったため、統計分析プログラムを用いた詳しい分析は行っていない。さらなる意味ある分析結果を得るためには、より大量のデータを収集し統計データの検証を行う必要もあるだろう。今後は、本稿の成果を踏まえ、日韓で実際行われた自然談話における感謝表現の使い分けを話者のストラテジーという観点から質的に分析する研究を行うことによって、本研究をさらに発展させていきたい。

注

¹ 一般的に「ウチ」の人間が「家族、自分の会社の人、自分の属するグループなど」であるのに対して、「ソト」の人間は「親しくない、他人、他会社の人、他グループの人など」である。(三宅, 1994)

² 韓国語を対象とするこれまでの発話行為の対照研究で、地域差は有効な要因として働いていなかった。そのため、筆者(金)にとってデータ収集が有利な釜山の大学生を中心にデータ収集を行なった。

引用文献

- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. New York, NY: Cambridge University Press.
- 秦秀美 (2002). 日・韓における感謝の言語表現ストラテジーの一考察. 日本語教育, 114, 70-79.
- Coulmas, F. (1981). Poison to your soul: Thanks and apologies contrastively viewed. In F. Coulmas (Ed.), *Conversational routine: Explorations in standardized communication situations and prepatterned speech* (pp. 69-91). The Hague: Mouton.
- 洪眠杓 (2006). 日韓両国人の言語行動の違い—感謝と謝罪表現の日韓比較— 日本語学, 25(6), 84-89.
- Jakobson, R. (1960). Linguistics and poetics. In T. Sebeok (Ed.), *Style in language* (pp. 350-377). Cambridge, MA: MIT Press.
- 金叔子 (2005). 韓日両言語のプレゼントの取り交わすときの感謝表現の比較. 国際韓国言語文化学会, 2(1), 17-32.
- 李在濬 (2012). 人間関係による意識と言語・非言語行動の違い—日韓大学生の感謝と挨拶程度の場面に對する行動を中心に— 言語科学論集, 16, 1-12.
- Malinowski, B. (1923). The problem of meaning in primitive languages. In C. K. Ogden, & I. A. Richards (Eds.), *The meaning of meaning* (pp. 296-336). London, England: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co.
- Mey, J. L. (1993). *Pragmatics: An introduction*. Oxford, England: Blackwell.
- 三宅和子 (1993). 感謝の意味で使われる詫び表現の選択メカニズム—Coulmas (1981) の indebtedness 「借り」の概念からの社会言語的展開— 筑波大学留学生センター日本語教育論集, 8, 19-38.
- 三宅和子 (1994). 日本人の言語行動パターン—ウチ・ソト・ヨソ意識— 日本語教育論集, 9, 29-39.
- 守屋美佐子 (2001). 韓日観光客の感謝と謝罪—韓日両語の対照研究— 慶州大学校観光学論集, 6, 1-22.
- 守屋美佐子 (2002). 謝罪と感謝の対象と表現—韓日語対照研究— 日本語教育, 22, 25-43.
- 守屋美佐子 (2004). 発話行為としての謝罪と感謝—日本語と韓国語との比較から— 論文集, 17, 1-11.
- 守屋美佐子 (2007). 韓日両言語における謝罪表現と感謝表現の対照研究—大学生の意識を中心に— 慶尚大学校大学院博士論文.
- 小川治子 (1995). 感謝とわびの定式表現—母語話者の使用実態の調査からの分析— 日本語教育, 85,

38-52.

生越まり子 (1994). 感謝の対照研究－日韓の対照研究
－ 日本語学, 13(8), 19-27.

Song, Y. M. & Mizushima, H. (2002). 韓国と日本の感謝
表現の比較研究 二重言語学, 20, 175-191.

谷口龍子 (2010). 詫びおよび感謝表現の選択と文・談
話構造との関わり－日本語と中国語のヴォイスに
注目して－ 東京外国語大学論集, 80, 179-198.

Thomas, J. (1983). Cross-cultural pragmatic failure.
Applied Linguistics, 4(2), 91-112.